
斬月

コウ 9 9

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

斬月

【Nコード】

N1661D

【作者名】

コウ99

【あらすじ】

流れから色々な考えを抱く少年に興味を持つ少女……………話はまだ始まってもない、この後どう紡がれてゆくのか……………

第一話 始まり（前書き）

読んでくださるみなさんに大感謝です！！

第一話 始まり

春の代名詞桜が咲き乱れ、そして散り始め、季節が春から初夏へと移り変わるのを告げたこの頃。

桜が立ち並ぶ小川の河原で静かにたたずむ少年が一人。その小さな背中とは、どこか寂しそうで頼りない…

盛りを迎えた桜の花びらがサラサラした風に流され、少しの間空を舞う。そして小川まで流され、また川の流れに流される……

その一連の移り変わりを目にして、僕は思う。

ただ、

「儚い」と。

何を偉そうに考えてんだか……情緒も趣も、まだ何にも知らないのに……

何で『儚い』って思ったんだろう……、何を根拠に理由にして……口に出して言ったのに、何も根拠も理由もありはしない。ただの直感………

河原には、僕一人しかいないけど無責任な言葉を吐いた自分がひどく恥ずかしい。

恥ずかしいと思いながらも、無責任な僕を肯定しようとする僕がいる。

確かに根拠も理由もないけど、本当は根拠も理由もあったかもしれない、僕のボキャブラリーが少なくて説明できなかっただけかもしれない。かもかもうるさいけど、可能性が0パーセントとは限らない。

予測の範疇を超えないけど、今の未熟な僕には救いになるから、そう思っていたい。

土手に上がって、もう一度河原を見下ろす。

ただ、

「もう一度ここへ…」と呟いた。

通りかかった男の子が、そんな僕にぎよっとしていた。聞かれてしまい少々恥ずかしい……

今さっき呟いた言葉はまぎれもなく直感によるもので無責任なものだが、これから起こることと比べれば大きな救いがある。

恥ずかしいけど、軽くなるんだ。

ポカポカ陽気に誘われ、昼の授業をサボって桜の枝にのって昼寝

した………ただ眠れない。ぼんやりしていると見慣れない少年が河原にたたずんでいる。顔は後ろを向いているのでわからない。髪は長くも、短くもない黒髪。身体格好からまだ中学生くらい。つてことは多分自分より年下だろうなあ。カワイイなあ。♪

しかし、以後全くカワイイと感じなくなる。

少年の後ろ姿は、寂しいの一言につきた。他には言いようがない……思いつかない……

少年を眺めるのは………楽しい。

突然拳動不審になったり、寂しそうな背中が、重たそうな背中が急にしっかりし始めたし。

少年が土手を駆け上がり、ゆっくり消えていく……

これでゆっくり寝れるや………やっぱり………気になるよあ……

てなわけで尾行スタートだね。

第一話 始まり（後書き）

読んでいただきありがとうございました。 正直わけわかんないと思う人がほとんどだと思います。けどこれから続く話でいろいろ繋がるので我慢強く読んでいただけたら本当にありがたいです。

第二話（前書き）

続きですっ！！！！！！

第二話

春の昼下がりに、太陽もまだ天にあり空は明るいがこの路地裏は暗い。

そしてとても静かだ。

流れる音は風のみ……

ポタリ、ポタリと頬を流れる汗がもどかしい……全身から吹き出る汗がひどくもどかしい……

だけど、一番もどかしいのはこの気持ち……ドロドロしていて足の方からじわりじわりと侵されるこの感覚……気持ち悪い。

喉にピタリとついて離れない冷たく鋭利な物。そのせいで呼吸することすらままならない。呼吸がうまくできない。自然と呼吸が荒くなる、だけど喉に張りついたナイフが目に入って、動けず更に苦しくなる。

すると、私の心は、身体は、命じていないのに……
……震えだす……

やだ何で震えてるの……止まってよ、止まってよ。そんなこと望んでないのに、しようと思っただけなのに……

動いてはいけない状況だとは分かってる、……だけど何でだろ？止まらないよ。

目に入るのは、冷たいビルの壁に狭い空。街の喧騒は遠くて誰も来ない……私、死ぬのかなあ？

呟いてはいけなかった、例えば口に出さずとも思ってもいけなかった。

「死ぬ」と……

[illegible]

「やだ……死にたくないよ」とポロリとこぼれる。

言葉を紡ぐため動いた喉に冷たい死の感触。ナイフ。この状況でやってはならない愚かな行為だと分かっているけど、紡がずにはいられなかった。

紡ぐという愚かな行動をとった直後、最も愚かな行動をとった。

死にたくない……、
だけどナイフが邪魔だ。

死にたくない……、なら邪魔な物をどければいい。

頭の片隅で理性がヤメ口と吼えるが気にしない。だって死にたくないから。

ナイフをどけようと手を伸ばしかけたその時、

「死にたくなかったら、動くな……」と冷たく低い声が頭に響く。

余りの緊張に弛緩していた頭が即座に正常に切り替わる。手と震えもピタリた止まった。

そして気付いた、自分がどれだけ愚かな行動をとっていたかを……

…どれだけ死に近かったことを……

また身体が震え出す。それを必死に止める、……死にたくないから。

しかし心に反して自然と身体が震える。止まらない……止まってくれない。びくびく動く喉にナイフが当たって、嫌でも

「死」を感じてしまう。

「死」という恐怖が腹の底で蠢いて気持ちが悪い、吐きそうだ……

恐怖に伴って身体もいつそう震え出し、おまけに吐き気まで……最悪だ。

余りにも近すぎる死の感触に私はついに負けた……

「もう死にたい。」と

重い言葉。

理性と共に崩れ落ちる私の身体……欲望に従順で吐き気に従い嘔吐する……

嘔吐してる途中後ろで声がした、

「忘れる、次に会っても関わるな………」と言って少年は去っていった。

嘔吐しながらも頭は正常に働いていた。そして理解していた……少年のセリフの意味も。

.....
.....
吐き気が治まって空を見上げた。空は青かいけど、狭くて小さい。
それを見ていると.....

この日、私は初めて声を押し殺して泣いた.....

第二話（後書き）

読んでくださって、本当に大感謝、感激雨あられます!!! 今後
頑張って書くので是非見てください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1661d/>

斬月

2010年10月10日08時06分発行